

---

# 傭兵の代行者

七荻 剛亜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

傭兵の代行者

### 【Nコード】

N8081X

### 【作者名】

七菰 剛亜

### 【あらすじ】

親バカな魔物四人に育てられたラギウス。

16歳の誕生日を迎えた朝、彼は初めての一人旅にでる。

目指すは徒歩二日の近所の街！

そこで冒険者ギルドに登録して帰るだけ……のはずだったのだが、  
そう簡単には帰れそうになく……。

## 始まりの朝

夢を見る。それも毎回同じ夢を。

訓練に疲れて、泥のように眠る時なんかいつもそうだ。

物心がついた頃には既に見るようになっていた、馴染み深く、それでいて馴れる事の無い夢。

目が覚めると、どんな夢だったのか思い出せない。

だからきつと、馴れる事なんて無いんだと思う。

ああ、またか。

そんな風に溜め息を吐いて、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔を腕で乱暴に拭う。

その度に、いつ部屋に入ったのか、母さんが俺を抱きしめてくれる。

どうして俺が夢を見たのを知ってるのかはわからない。

母親の勘だというけど、実の母親じゃないのに分かるものなのだろうか？

いや、それ以前に、母さんは種族的に子供が作れないはずだ。

もしかしたら自分が知らないだけで、寝ている間に悲鳴でもあげているのかも知れない。

うわ、なんて迷惑な奴なんだ。

こんなんで一人旅なんてできるのか？

そんな事を考えながら、俺、ラギウス・ベルカントは16歳の誕生日の朝を迎えた。

## 第一話

服を着替えて部屋を出る。

幾つもの部屋の扉がある廊下を左に進み、階段を降りると、マスターが作ったのであろう朝食の匂いに腹がなる。

いい歳して、さっきまで母さんに抱きついていたくせに現金なもんだなあ、と苦笑してしまう。

階段を降りたそこは広い食堂兼酒場になっており、6人が座れるテーブルが6つ並んでいる。

知らない人が見れば、何処からどう見ても宿屋か酒場にしか見えないだろう。

「おはよう、ラギ」

「おはようございます」

「おう、起きたか」

その一角、カウンターの出入り口に近い、いつも食事の時に使うテーブルに母さん、先生、師匠が座っていた。

「おはよう母さん、先生、師匠」

朝の挨拶をしていつもの席に座る。

見ればテーブルには既に手付かずの朝食……サラダやスープが並び、三人ともお茶が半分以上減っている。

待たせてしまったかなとは思うが、口にするのは止めておいた。些細な事だが、わざわざ気を使わせる必要はない。

それよりも、

「なんか居づらい」

皆して俺を見るのは止めてもらいたい。

俺の左隣では母さん……二十代半ば程にしか見えない、思わず目を奪われるような大きな胸を持ち、赤い薄手のドレスを纏った美しいサキュバス、エリアーデが腰まである長い紫色の髪を弄りながらにこにここと。

正面では先生……俺の少し上くらいの年頃にしか見えない、青白くて眼鏡をした金髪の美しい青年、リッチのナハトがクスッと。

右斜め前では師匠……三十代半ば程の四角い顔に無精髭を生やし、額に赤い鉢巻きをしたガタイの良い赤髪の男、人狼のヴォルフガンクがにやにやと。

それぞれが笑みを浮かべながら俺の事を見ている。

……毎年の事だけど、どうにも対応に困る。

「いいじゃない、お誕生日なんだから。ほ~~~~っんと、子供が育つのもって早いわねえ」

そう言っただけに抱きついて頬擦りしてくる母さん。  
因みに頬擦りはいつもの事である。  
あと乳首つまむな。

「エリアーデの言う通りです。保護者である我々が祝いたい以上、ラギに拒否権はありません」

「ああ、ガキンちょは素直に喜んできゃあ良いんだよ」

「別に喜んでない訳じゃなけどさ」

乳首をつまむ母さんの手を払いつつ、抱き返しながらばやく。  
もちろん嬉しい。嬉しいのだから、どうにも気恥ずかしい。  
なんというか、このままだと一生子供扱いされそうな気がする。

「はいはいはい、皆さん揃ったなら食事にしますぞ」

そう言っただけカウンターの中からマスター……白髪をオールバックに固め、白いシャツに黒のベストを着たダンディーな、それでいて好好爺然とした微笑みを浮かべる白い口髭の老人が、両手に料理が

乗った大皿を持って出てきた。

因みにマスターの種族と名前は俺も知らない。

まあ一番古い記憶……十年以上前のマスターと顔が全く変わっていないので、たぶん人間ではないと思う。

「ラギさんももう16歳なんですから、いつまでも子供扱いでは可哀想ですぞ」

そう言ってマスターは、テーブルの真ん中に2つの大皿を置いた。

片方はソースで艶々と輝くチキンの丸焼き。

そしてもう片方は……、

「……………」

「やだ、可愛い……ッ！」

「ほう、これはなかなか」

「…………ジジイ、どの口で子供扱いは可哀想なんてほざきやがった」

二頭身にデフォルメされた俺の絵が描かれた大きなケーキ。  
さらに絵の下の方には、

「「「ラギきゅん、お誕生日おめでとう……!」「」「」

と、書かれていた……というか、師匠以外の三人に言われた。

「それじゃあ、そろそろかしら……あむ」

皆で乾杯してマスターの料理を堪能した後、デザートとして目の前に差し出された大きなケーキを頬張っていると、ふいに母さんが切り出し、唇の端に付いていたクリームを舐めとられた。

まあ、これもいつもの事だ。

「……いつもながら引くぜ」

「いまさらですが少しは子離れしなさい」

「おやラギさん、まだクリームが付いておりますぞ？じゅるり……  
どれ、私も」

「」「」「やめんかクソジジイ！！」「」「」

…………さて。

今さらだが、この世界では魔物と人間が共存しているのかといえ  
ば、そんな事は無い。

むしろ完全に敵対関係にあるという方が正しいだろう。

他の大陸の事までは知らないが、少なくとも俺達が住んでいるパ  
ルギア大陸ではそうだ。この大陸には国が四つあるが、どの国でも  
魔物は討伐対象とされている。

では何故か、と問われたら、わからないとしか答えられない。

わかっているのは、幼い頃に捨てられたらしい俺は、変わり者の  
四人に拾われ、16歳になる今日まで育てられてきたという事。

母さんには母親の愛情や温もり、魔法とは少し違う妖術や呪いの  
技術を与えられた。

先生には魔法の使い方と言葉、計算や学問を教えられた。

師匠には体術や武器の扱い、旅の技術を叩き込まれた。

じ…マスターには料理や作法、文化や様々な知識を教授された。

あとは四人が傭兵として仕事を請け負っているらしいという事く  
らいだ。

そして俺は傭兵稼業を手伝う許しを得る為に、今日から旅に出る。  
…まあ旅といっても、片道二日の街に行って冒険者ギルドに登録  
してくるだけだが。

これは師匠の提案で、冒険者ギルドに登録しておけば色々と便利

らしいし、一人旅で見聞を広げる事を意図しての事らしい。

最初は四人とも普通の仕事に就いて欲しいと思っていたようなのだが、俺が何年もかけて説得した。

たまに仕事に行く家族を見送って、不安な中帰りを待つのはもう御免なのだ。待つくらいなら一緒に戦いたい。

そんな訳で今日から俺は旅に出る。この誕生日会の後すぐに出発だ。……本当は去年の予定だったけど、母さんが駄々をこねたから一年遅くなったんだけどな。

「……………では、まず私からすな」

一撃で岩をも砕く三人の拳でボコボコにされたマスターが、ベスの内側から茶色の布袋を取り出し、その中から四つの白い置物を出してテーブルに並べる。

「どうぞ、手に取ってみてください」

「これは？」

手を伸ばして置物の一つを掴む。チェスの駒と同じくらいの大きさだろうか？

固いけど軽く、円柱状の根元の部分以外は蝙蝠の翼を生やした女性性の形に造られて……いや、この形は一つだけで、よく見れば他の

はそれぞれ狼、ローブを纏った骸骨、人間の形のようなだ。

「代行者の神像と呼ばれるものです。それぞれに我々の力が宿っていて、危険な時や困った時、そして日常に至るまで、ラギさんを助けるでしょう。一応オリハルコン並に固いので壊れる心配もありません。ちなみに落としたり捨てたりしても必ず戻ってくるし、盗んだ人間は必ず謎の変死を遂げるというアフターサービス付きですぞ」

……後半だけ聞くと、それは下手したら呪われていると言っているのではなからうか？

「さらに就寝時には目を光らせて周囲を徘徊か……もとい警戒し、奇声や呪いの言葉で不審者を威嚇しつつ抹殺してくれますぞ！」

「まんま呪われてんじゃねえか！」

「さらにさらに！一人旅でさみしい時はお話相手にもなってくれませうぞ！定期的に話し掛けないと血の涙を流しながら泣き叫んだり寝てる間に縛られてじっと見詰め続けたりしますがね！！」

「引つ込めジジイ！！」

とりあえずマスターの顔に全力で叩きつけてみた。

あ、あと母さんにペンダントとか師匠に剣とか先生に軽装鎧一式とか貰った。特に呪われているような物も無かった。  
やっぱ普通のプレゼントが一番だ。

「はあああゝ、行っちゃったわねえ……」

テーブルに突っ伏したエリアーデは盛大な溜め息を吐き、テーブルをガタガタと揺する。

街に無事に着くだろうか？怪我をしないだろうか？風邪を引かないだろうか？ご飯を自分で作れるだろうか？ちゃんと一人で寝て一人で起きられるだろうか？朝抱き締めてあげないで大丈夫だろうか？お小遣いはもう一年分ぐらい渡した方が良かっただろうか？男や女に襲われたりしないだろうか？避妊は大丈夫だろうか？やっぱりこっそり後を……

「落ち着きなさいエリアーデ、お茶がこぼれます。ちゃんと神像も装備も渡したし、ネフロなら片道二日です。何も無ければ、街で觀光をしたとしても一週間もあれば帰ってきますよ」

全く親バカなんだから。

そう言つて、ナハトは優雅にお茶を飲む。

だいたい神像を持たせた時点でもう何でもなるのだ。心配する必要はない。

「そんなのわかつてますう〜〜、母親が息子を心配するのは当たり前なんです〜〜、男には愛する息子を想う母親の気持ちなんか解らないんです〜〜っだ。それもこれもヴォルフのバカが余計なこと考えたのがいけないのよ」

余計な事。

それは一人旅の事はもちろん、一般人でも知っているような常識や知識の一部を意図的に教えない事だ。将来の事を考えて、自分で調べる事や情報を集める事の大切さを教えるというのが、エリアーデは断固として反対した。

情報も知識も自分達が教えれば良い。どの道ラギー一人で戦場に送り出したりなんてさせる気はない。

そう主張するエリアーデを他の三人が宥めすかしてなんとか了承させたが、やはり今でも納得できない。

「大体ね、何も無ければって、本当に何も無いと思うわけ!？」

鉄や鋼より数段硬いハルバンド鋼で補強されたテーブルをバンバン叩いて壊しかけているエリアーデの問い掛けにナハトが苦笑する。

「もちろん思つてませんよ?きつと大変な事になるでしょうね」

あの子の事だ、きつとんでもない事に巻き込まれるだろう……ましてや決戦迷宮なんですからね、と心の中で付け足す。

「それでも神像があれば大丈夫ですよ。……きっと驚くでしょうねえ」

驚愕するラギの顔を想像して、ナハトがクククツと黒い笑みを漏らす。

「ふんっ、全部あのバカが……………あれ？二人は何処に行ったのよ？」

「二人なら森の出口までこっそりつけてくるって、さっき出て行きましたよ？」

「…………あの駄犬とクソジジイ…………ッ！抜け駆けしやがったわね！」

ナハトは扉を粉碎して飛び出して行くエリアーデの騒々しさに眉をしかめ、溜め息を漏らす。

「まったく、ここには親バカしか居ないんですか」

そういつて懷から掌大の水晶玉を取り出して、僅かに魔力を込めてじっと凝視すると、水晶に森の中を歩くラギウスの姿がうつる。

「わざわざ行かなくても、こうすればどの角度からだって見守れるのに」

水晶玉越しに生徒兼息子を見詰め、優しく微笑むナハト。

やはりここには親バカしかいないのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8081x/>

---

傭兵の代行者

2011年10月22日06時14分発行